ロシア史研究会 ISSN 0919-990X

ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 73 *May 2009*

2009年度大会の概要が決定

大会は10月10(土)、11(日)の両日に法政大学で開催

（写真は1月例会の模様）

ロシア史研究会 2009 年度の大会準備が始まりました。昨年度は 4 年に一度の地方開催に加えて、一日午後に限ってロシア関係諸学会との共催という新しい試みがなされました。昨年 12 月に札幌で開かれた JACREES 幹事会では各学会の代表から好意的な感想が述べられたとの報告を受けています。

さて今年は平年通り首都圏でロシア史研究会単独の大会となりますが、企画委員でもある加納格氏のご尽力によって、10 月 10(土)、11(日)の両日に法政大学で開催されることになりました。場所の決定は、余儀ない事情でやや遅れましたが、すでに「自由論題」４本と「パネル」１本の申し込みがありました。「共通論題」についてはアンケート等では特に強いご要望がありませんでしたので、過去十年ほどのテーマと出来るだけ重ならないものを幾つか検討しました。その結果「近現代の都市と文化」、「帝国の拡大と移住政策」というテーマに絞られつつあります。コメンテーターの人選等まだ未確定な部分がありますが、委員会から突然の依頼が舞い込

んだ際には、どうぞ宜しくご協力をお願いする次第です。また今年の大会では委員の改選も行われますので、どうぞ早めに予定を組まれますようお願いします。

2009年4月30日

ロシア史研究会委員会

〈2009年1月例会記録〉

2009年1月24日(土)、午後3時からソビエト史研究会と合同で、東京大学法学部3号館203号室で、例会が開かれました。以下は、報告なさった野田氏による報告要旨です。

「第二次チェチェン紛争への道程（1996-1999 年）－マスハドフ政権による国家のイスラム化を中心に－」

野田 岳人（群馬大学）

2003 年以降、チェチェンの状況は脱軍事的方向へ転換した。振り返ってみると、二度の紛争を含むチェチェンの 90 年代の状況はその内容によって四つに時期区分される。第一は 91 年～94 年で、ドゥダーエフ率いる民族急進派による政権奪取の時期である。この時期の特徴は、政治過程におけるエスノナショナル的要素が強化され、支配されていった点であった。第二は 94 年～96 年で、エスノナショナル的スローガンの下、軍事的紛争へと発展した（第一次紛争）。第三は 96 年～99 年でバサエフ、マスハドフらを指導者とするイスラム主義者が台頭し、政権を奪取した時期である。シャリーア法の実地導入とチェチェン領土にイスラム国家を建設しようとする試みがなされ、政治過程においては宗教的要素が強化された。第四の 99 年～2000 年ではエスニック的・宗教的偏向をもたらす活動が軍事的段階へと発展した（第二次紛争）。

第一次紛争へ至る第一の時期（91～94 年）では、民族意識が高揚する中でチェチェン人とイングーシ人を含む統合的な意識の表出（ヴァイナフ主義）とチェチェン人とイングーシ人それぞれの意識の発露（チェチェン主義、イングーシ主義）が見られた。統合の要素としては、これら民族的要素と指導者ドゥダーエフのカリスマ性が指摘できる。他方、分離的要素としては、宗教的共同体（スーフィ・タリーカ）と伝統的地域共同体（トゥフムやテイプ）、権力闘争（大統領と議会）が挙げられる。

第二次紛争に至る第三の時期（96～99 年）では、ハサヴユルト合意（96 年 8 月）をはじめロシアとの交渉役を務めたマスハドフが政治を主導していく。97 年 1 月の大統領選でマスハドフが当選した。マスハドフ体制の特徴は、主たる閣僚に民族急進派の政治運動体の代表者を登用したところにあった。しかしながら、98 年に入ると民族急進派の指導者は政権から離反し、政権の支持基盤が弱体化してくる。それぞれの政治運動体は、当初チェチェン国家の建設を最重要課題と位置づけ政権を支えていったが、ハサヴユルト合意以降、チェチェンは事実上独立した状態であったため、各運動体はチェチェン国家のあり方を求め、対立していった。対立の論点は大きく二つあり、国家のイスラム化と国家の範囲をめぐる争いであった。マスハドフはこれら反対派の圧力に押され、99 年 2 月にシャリーア導入を認めるに至った。報告では、イスラム化の過程を概観するとともに、当時の世論調査を手がかりに人民の意識変化にも言及した。最後に二つの紛争のアクターを構図化し、ブラウン（Michael E. Brown）の紛争原因論を用いて考察した。

〈2009年3月例会記録〉

2009年3月21日（土）に午後3時から慶應義塾大学（三田キャンパス）南館5階会議室のディスカッションルーム（D-2051号室）にて、例会が開かれました。以下は報告なさった飯田氏による報告要旨です。

「シベリア植民初期における『軍事勤務者』」

飯田 ちひろ（早稲田大学）

本報告では、シベリア植民初期における「軍事勤務者」の構成や任務、ロシア政府との関係について述べた。そして、ロシア国家によるシベリア支配において、軍事勤務者が不可欠の存在であったことを示した。

君主に対して軍事的な勤務を行い、代償として俸給を得る軍事勤務者は 16 世紀末から 17 世紀にかけてシベリアに派遣された。16、17 世紀の現地ロシア人社会において、軍事勤務者は数の上で最大の集団であった。軍事勤務者は出自や職能によって「小士族」、「銃兵」、「砲手」、「カザーク」、「勤務タタール」、「リトヴァ」に区分される。勤務タタールとリトヴァは非ロシア人（非ロシア正教徒）であり、民族的な多様性が指摘できる。とりわけ、ポーランド人が多くを占めるリトヴァは、先進的な軍事技術や識字能力によって重用された。また、軍事勤務者内の各集団は共同で任務を行い、複数の集団で共同嘆願を行うなど、閉鎖性は低かった。

軍事勤務者は遠征、拠点建設、防衛、ヤサク（先住民から徴収する現物貢租）徴収、輸送の任務を担っていた。軍事勤務者は遠征を行って先住民を征服し、ヤサクを課した。同時に、ヤサク徴収や更なる遠征のための拠点を建設し、防衛した。ヤサクを徴収し、シベリア内の中心拠点やロシア本国へ輸送した。さらに、自身の俸給となる現金や穀物、塩の輸送も行った。つまり、軍事勤務者はロシア国家による毛皮獲得システムの全般を担っていたのである。ロシア政府による主要な毛皮獲得手段は税としての徴収であった。税としての毛皮獲得は人の支配を伴い、恒常的な軍事力を必要とする。支配に必要な軍事力を供給したのが軍事勤務者であった。

軍事勤務者とロシア政府は、軍事的勤務と俸給によって結ばれた相互依存関係にある。中央政府にはシベリアの案件を扱う独立した官署が設けられた。官署から現地の総督に対して、軍事勤務者の派遣人数や給与について指示が出された。また、軍事勤務者が提出した嘆願に応える内容の指令が出されることもあった。中央政府にとって、毛皮獲得システム全般担う軍事勤務者は不可欠な存在であり、軍事勤務者を統率することは重要な課題であったのである。

軍事勤務者はロシア国家によるシベリア支配の特性を体現する存在である。

2009年4月4日（土）の午後5時から、神田学士会館３２０号室にて、「和田春樹先生古稀を祝う会」が開催されました。ロシア史研にたいへんに関係の深い催しでしたので、会の発起人の石井規衛会員に、ニューズレターへの寄稿をお願いしました。

（会後の集合写真）

〈会員寄稿〉「和田春樹教授古稀を祝う会」報告　　石井規衛（東京大学）

本年４月４日の土曜日に神田学士会館にて「和田春樹教授古稀を祝う会」が和田先生ご夫妻をお招きして催され、６０人ほどの方々が北海道や沖縄、韓国からも駆けつけた。はじめに和田先生のお話をうかがった後、姜尚中さんの御発声による乾杯で宴は始まった。その後、雑誌『世界』編集長岡本厚さん、日露関係史のサルキソフさん、スラブ文学の沼野充義さん、ロシア外交史の横手慎二さん、韓国から駆けつけた南基正さん、ジャーナリスト蒋峥(ジャンスン)さんの６名の方が、限られた時間ではあったが、儀礼抜きの心暖まるお祝いの言葉を述べられた。宴も終盤に入ったところで、いかなる縁か河本和子さんと池田嘉郎さんという還暦時と同じ二人が、和田先生ご夫妻へ花束を贈呈した。最後に、あき子夫人から配偶者ならではの和田春樹論を拝聴したのち、全員で写真撮影をし、華やいだ雰囲気が残る中ご夫妻をお見送りした。

十年前は東京大学退官の時でもあったためにそれに応じた性格と、形と、規模のものになったが、今回はそれとは大きく異なっていた。単に７０歳を迎えたことを祝う一方向的な恒例行事ではなかった。東大を離れてから十年間の新たな研究の蓄積と、一市民的知識人としての活動の実績を踏まえた「今の和田春樹」を、自ら後進に示したいという強いお気持ちに貫かれた集いであった。そのことから今回、〈和田ゼミ・講義（ロシア・東欧史、朝鮮史）〉、〈日露戦争研究〉、〈市民としての活動〉、〈出版・メディア〉などでとくにゆかりの深い方々からなる集いとなったのだった。そうした会のあり方をなによりも象徴していたのが、はじめの３０分間、完成間近の日露戦争の研究の要点や史料を紹介しながら和田先生自らお話しされたことである。ここに現出しているのは、かつての和田ゼミ、和田講義でもあれば、いわば真に互酬的な集いでもあっただろう。なぜなら、そのように「今の和田春樹」を積極的に示されることは、お祝いに駆けつけた方へのこの上ない「お返し」でもあったからだ。なお二次会は、和田先生

と数十年来の知己である西村氏がオーナーの葡萄亭（本郷）でおこなわれた。その場において、和田先生と、最初期のゼミ生にして最年長である藤本和貴夫さんのお二人が並んで座っている姿が、なぜか私にはとても微笑ましく思えた。このことを最後に付け加えておく。

ニューズレターの記事の訂正

前号No.72で「2005年度大会以降の入会者が8名、退会者が7名（うち物故者2名）で、2006年9月1日の時点の会員は昨年より1名増の273名」（第１頁）とあったのは、「2007年度大会以降の入会者が8名、退会者が7名（うち物故者2名）で、2008年9月1日の時点の会員は昨年より1名増の273名」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。（ニューズレター担当：梶）

＜委員会からのお知らせ＞

○『ロシア史研究』について（雑誌編集担当：中嶋）

会誌第84号は発行が大幅に遅れておりましたが、6月中旬ころにはお手元にお届けする予定です。引き続き85号に向けての編集作業をおこなっておりますが、論文は随時受け付けておりますので、会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしております。

○学会費支払いのお願い（会計担当：崔）

ロシア史研究会は９月に年度が替わり、 今年の１月に会費を請求させていただきました。しかし、目下、多くの会員におかれましては、会費が未納のままになっております。未納の方は、下記の郵便振替口座にご入金くださるようお願いいたします。

振替口座番号：　００１５０－０－８７３８３　　口 座 名 義：　ロシア史研究会

○住所ラベルの識別記号について（会計担当：崔、名簿担当：半谷）

事務局から送られる郵便物の住所ラベルの最下段に識別記号が入っておりますが、その読み方は、以下の通りです。例えば、「Ｂ07/08；08/09未」の場合は、Ｂ会員で、2007/8年度と2008/9年度の会費が未納であることを、また、「Ａ08/09未」の場合は、Ａ会員で2008/9年度の会費が未納であることを意味します。このように事務局からの郵便物の住所ラベルを通じて、会員各人の会費納入状況が確認できるようになっておりますので、毎回ご確認の上、未納の場合はできるだけ早く会費を納めるようお願い申し上げます。

ロシア史研ニューズレター

第73号　2009年5月15日発行

編集・発行　ロシア史研究会委員会

〒183-8534

東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学外国語学部

鈴木義一研究室気付